月夜のけだもの

宮沢賢治

十日の月が西の煉瓦塀にかくれるまで、もう一時間しかありませんでした。

その青じろい月の明りを浴びて、獅子は檻のなかをのそのそあるいて居りましたが、ほかのけだものどもは、頭をまげて前あしにのせたり、横にごろっとねころんだりしづかに睡ってゐました。夜中まで檻の中をうろうろうろうろしてゐた狐さへ、をかしな顔をしてねむってゐるやうでした。

わたくしは獅子の檻のところに戻って来て前のベンチにこしかけました。

するとそこらがぼうっとけむりのやうになってわた

くしもそのけむりだか月のあかりだかわからなくなってしまひました。

いつのまにか獅子が立派な黒いフロックコートを着て、肩を張って立って

「もうよからうな。」と云ひました。

すると奥さんの獅子が太い金頭のステッキを恭しく渡しました。獅子はだまって受けとって脇にはさんでのそりのそりとこんどは自分が見まはりに出ました。

そこらは水のころころ流れる夜の野原です。

ひのき林のへりで獅子は立ちどまりました。向ふから白いものが大へん急いでこっちへ走って来るのです。

獅子はめがねを直してきっとそれを見なほしました。それは白熊(しろくま)でした。非常にあわててやって来ます。獅子が頭を一つ振って道にステッキをつき出して云ひました。
「どうしたのだ。ひどく急いでゐるではないか。」
白熊がびっくりして立ちどまりました。その月に向いた方のからだはぼうっと燐(りん)のやうに黄いろにまた青じろくひかりました。
「はい。大王さまでございますか。結構なお晩でございます。」
「どこへ行くのだ。」

「少し尋ねる者がございまして。」
「誰(たれ)だ。」
「向ふの名前をつい忘れまして、」
「どんなやつだ。」
「灰色のざらざらした者ではございますが、眼(め)は小さくていつも笑ってゐるやう。頭には聖人のやうな立派な瘤(こぶ)が三つございます。」
「ははあ、その代り少しからだが大き過ぎるのだらう。」
「はい。しかしごくおとなしうございます。」
「所がそいつの鼻ときたらひどいもんだ。全体何の罰

であんなに延びたんだらう。おまけにさきをくるっと曲げると、まるでおれのステッキの柄のやうになる。」

「はい。それは全く仰(おほ)せの通りでございます。耳や足さきなんかはがさがさして少し汚なうございます。」

「さうだ。汚いとも。耳はボロボロの麻のはんけち或(あるい)は焼いたするめのやうだ。足さきなどはことに見られたものでない。まるで乾いた牛の糞(くそ)だ。」

「いや、さう仰(お)っしゃってはあんまりでございます。それでお名前を何と云はれましたでございませうか。」

「象だ。」

「いまはどちらにおいででございませうか。」

「俺は象の弟子でもなければ貴様の小使ひでもないぞ。」
「はい、失礼をいたしました。それではこれでご免を蒙ります。」
「行け行け。」白熊は頭を掻きながら一生懸命向ふへ走って行きました。象はいまごろどこかで赤い蛇の目の傘をひろげてゐる筈だがとわたくしは思ひました。
ところが獅子は白熊のあとをじっと見送って呟やきました。
「白熊め、象の弟子にならうといふんだな。頭の上の方がひらたくてい丶弟子になるだらうよ。」そして又

のそのそと歩き出しました。

月の青いけむりのなかに樹のかげがたくさん棒のやうになって落ちました。

そのまっくろな林のなかから狐が赤縞の運動ズボンをはいて飛び出して来ていきなり獅子の前をかけぬけようとしました。獅子は叫びました。

「待て。」

狐は電気をかけられたやうにブルルッとふるへてからだ中から赤や青の火花をそこら中へぱちぱち散らしてはげしく五六遍まはってとまりました。なぜか口が横の方に引きつってゐて意地悪さうに見えます。

獅子が落ちついてうで組みをして云ひました。
「きさまはまだ悪いことをやめないな。この前首すぢの毛をみんな抜かれたのをもう忘れたのか。」
狐がガタガタ顫（ふる）へながら云ひました。
「だ、大王様。わ、わたくしは、い今はもうしゃう正直でございます。」歯がカチカチ云ふたびに青い火花はそこらへちらばりました。
「火花を出すな。銅臭くていかん。こら。偽（うそ）をつくなよ。今どこへ行くつもりだったのだ。」
狐は少し落ちつきました。
「マラソンの練習でございます。」

「ほんたうだらうな。鶏を盗みに行く所ではなからうな。」

「いえ。たしかにマラソンの方でございます。」

獅子は叫びました。

「それは偽（うそ）だ。それに第一おまへらにマラソンなどは要らん。そんなことをしてゐるからいつまでも立派にならんのだ。いま何を仕事にしてゐる。」

「百姓でございます。それからマラソンの方と両方でございます。」

「偽だ。百姓なら何を作ってゐる。」

「粟（あは）と稗（ひゑ）、粟と稗でございます。それから大豆（まめ）でござ

います。それからキャベヂでございます。」
「お前は粟を食べるのか。」
「それはたべません」
「何にするのだ。」
「鶏にやります。」
「鶏が粟をほしいと云ふのか。」
「それはよくさう申します。」
「偽だ。お前は偽ばっかり云ってゐる。おれの方にはあちこちからたくさん訴が来てゐる。今日はお前のせなかの毛をみんなむしらせるからさう思へ。」
狐（きつね）はすっかりしょげて首を垂れてしまひました。

「これで改心しなければこの次は一ぺんに引き裂いてしまふぞ。ガアッ。」

獅子(しし)は大きく口を開いて一つどなりました。

狐はすっかりきもがつぶれてしまってたゞ呆(あき)れたやうに獅子の咽喉(のど)の鈴の桃いろに光るのを見てゐます。

その時林のへりの藪(やぶ)がカサカサ云ひました。獅子がむっと口を閉ぢてまた云ひました。

「誰(たれ)だ。そこに居るのは。こゝへ出て来い。」

藪の中はしんとしてしまひました。

獅子はしばらく鼻をひくひくさせて又云ひました。

「狸(たぬき)、狸。こら。かくれてもだめだぞ。出ろ。陰険

なやつだ。」
狸が藪からこそこそ這ひ出して黙って獅子の前に立ちました。
「こら狸。お前は立ち聴きをしてゐたな。」
狸は目をこすって答へました。
「さうかな。」
そこで獅子は怒ってしまひました。
「さうかなだって。ずるめ、貴様はいつでもさうだ。はりつけにするぞ。はりつけにしてしまふぞ。」
狸はやはり目をこすりながら
「さうかな。」と云ってゐます。狐はきょろきょろそ

の顔を盗み見ました。獅子も少し呆れて云ひました。
「殺されてもいゝのか。呑気なやつだ。お前は今立ち聴きしてゐたらう。」
「いゝや、おらは寝てゐた。」
「寝てゐたって。最初から寝てゐたのか。」
「寝てゐた。そして俄に耳もとでガアッと云ふ声がするからびっくりして眼を醒ましたのだ。」
「あゝさうか。よく判った。お前は無罪だ。あとでご馳走に呼んでやらう。」
　狐が口を出しました。
「大王。こいつは偽つきです。立ち聴きをしてゐたの

です。寝てゐたなんてうそです。ご馳走なんてとんでもありません。」

狸（たぬき）がやっきとなって腹鼓を叩（たた）いて狐を責めました。

「何だい。人を中傷するのか。お前はいつでもさうだ。」

すると狐もいよいよ本気です。

「中傷といふのはな。ありもしないことで人を悪く云ふことだ。お前が立ち聴きをしてゐたのだからそのとほり正直にいふのは中傷ではない。裁判といふもんだ。」

獅子（しし）が一寸（ちょっと）ステッキをつき出して云ひました。

「こら、裁判といふのはいかん。裁判といふのはもっとえらい人がするのだ。」
狐が云ひました。
「間違ひました。裁判ではありません。評判です。」
獅子がまるであからんだ栗（くり）のいがの様な顔をして笑ひころげました。
「アッハッハ。評判では何にもならない。アッハッハ。お前たちにも呆（あき）れてしまふ。アッハッハ。」
それからやっと笑ふのをやめて云ひました。
「よしよし。狸は許してやらう。行け。」
「さうかな。ではさよなら。」と狸は又藪（やぶ）の中に這（は）ひ

込みました。カサカサカサカサ音がだんだん遠くなります。何でも余程遠くの方まで行くらしいのです。

獅子はそれをきっと見送って云ひました。

「狐。どうだ。これからは改心するか、どうだ。改心するなら今度だけ許してやらう。」

「へいへいい。それはもう改心でも何でもきっといたします。」

「改心でも何でもだと。どんなことだ。」

「へいへい。その改心やなんか、いろいろいゝことをみんなしますので。」

「あゝやっぱりお前はまだだめだ。困ったやつだ。仕

方ない、今度は罰しなければならない。」

「大王様。改心だけをやります。」

「いやいや。朝までこゝに居ろ。夜あけ迄(まで)に毛をむしる係りをよこすから。もし逃げたら承知せんぞ。」

「今月の毛をむしる係りはどなたでございますか。」

「猿(さる)だ。」

「猿。へい。どうかご免をねがひます。あいつは私とはこの間から仲が悪いのでどんなひどいことをするか知れません。」

「なぜ仲が悪いのだ。おまへは何か欺(だま)したらう。」

「いゝえ。さうではありません。」

「そんならどうしたのだ。」

「猿が私の仕掛けた草わなをこはしましたので。」

「さうか。そのわなは何をとる為(ため)だ。」

「鶏です。」

「あゝ呆(あき)れたやつだ。困ったもんだ。」と獅子(しし)は大きくため息をつきました。狐(きつね)もおいおい泣きだしました。

向ふから白熊(しろくま)が一目散に走って来ます。獅子は道へステッキをつき出して呼びとめました。

「とまれ、白熊、とまれ。どうしたのだ。ひどくあわててゐるではないか。」

「はい。象めが私の鼻を延ばさうとしてあんまり強く引っ張ります。」
「ふん、さうか。けがは無いか。」
「鼻血を沢山出しました。そして卒倒しました。」
「ふん。さうか。それ位ならよからう。しかしお前は象の弟子にならうといったのか。」
「はい。」
「さうか。あんなに鼻が延びるには天才でなくてはだめだ。引っぱる位でできるもんぢゃない。」
「はい。全くでございます。あ、追ひかけて参りました。どうかよろしくおねがひ致します。」

白熊は獅子のかげにかくれました。
象が地面をみしみし云はせて走って来ましたので獅子が又ステッキを突き出して叫びました。
「とまれ、象。とまれ。白熊はこゝに居る。お前は誰(たれ)をさがしてゐるんだ。」
「白熊です。私の弟子にならうと云ひます。」
「うん。さうか。しかし白熊はごく温和(おとな)しいからお前の弟子にならなくてもよからう。白熊は実に無邪気な君子だ。それよりこの狐を少し教育してやって貰(もら)ひたいな。せめてうそをつかない位迄な。」
「さうですか。いや、承知いたしました。」

「いま毛をみんなむしらうと思ったのだがあんまり可哀さうでな。教育料はわしから出さう。一ヶ月八百円に負けて呉れ。今月分丈けはやって置かう。」獅子はチョッキのかくしから大きながま口を出してせんべい位ある金貨を八つ取り出して象にわたしました。象は鼻で受けとって耳の中にしまひました。

「さあ行け。狐。よく云ふことをきくんだぞ。それから。象。狐はおれからあづかったんだから鼻を無暗に引っぱらないで呉れ。よし。さあみんな行け。」

白熊も象も狐もみんな立ちあがりました。

狐は首を垂れてそれでもきょろきょろあちこちを盗

み見ながら象について行き、 白熊は鼻を押へてうちの方へ急ぎました。

　獅子(しし)は葉巻をくはへマッチをすって黒い山へ沈む十日の月をじっと眺(なが)めました。

　そこでみんなは目がさめました。 十日の月は本当に今山へはひる所です。

　狐も沢山くしゃみをして起きあがってうろうろうろうろ檻(をり)の中を歩きながら向ふの獅子の檻の中に居るまっくろな大きなけものを暗をすかしてちょっと見ました。

底本：「新修宮沢賢治全集　第十一巻」筑摩書房
　　１９７９（昭和54）年11月15日初版第1刷発行
　　１９８３（昭和58）年12月20日初版第5刷発行
※底本は旧仮名ですが、拗促音は小書きされています。
これにならい、ルビの拗促音も、小書きにしました。
入力：林　幸雄
校正：土屋隆
２００８年2月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。